

# 郷土博物館・文学館だより

企画展

## 道具のかたち

3月25日まで  
開催中!

—区内出土資料からみた道具のいろいろ—



展示室風景

現在、当館では企画展「道具のかたち—区内出土資料からみた道具のいろいろ—」を開催しています。

今回の展示は、渋谷区内で出土した遺物の中から、当時の人たちが日常生活で使ったと思われる道具を選び、「にる」「そそぐ」など6つのテーマにわけて展示しています。また、近代以降の民具も一緒にならべ、時代によって変わってきたもの、あるいは変わらなかったものが比較できるようにしました。ぜひ、ご覧ください。



鶯谷遺跡・円山町遺跡出土の台付甕など(上)と豊沢貝塚から出土した縄文時代の注口土器



2月10日の展示解説風景

## 100年前の「公会堂」

渋谷の公会堂といえば、平成27年(2015)に閉館した「渋谷公会堂」がすぐに思い浮かぶのではないのでしょうか。昭和39年(1964)に建てられ、数々の名コンサートが開かれた公会堂は、渋谷の中でも著名な建物の一つでした。しかし、今から100年近く前にも、渋谷の人々が自慢にしていた公会堂があったことをご存知でしょうか。

それは大正8年(1919)に渋谷町によって建設された「渋谷町公会堂」のことです。現在の恵比寿西二丁目付近の見晴しのいい台地の上に建っていた木造二階の建物は、二階は700人を収容できる大集会堂と他4室、一階は和室3室、洋室6室から成り、さらに付属図書室をも備える立派なものでした。

具体的な建設は大正4年に建議案が提出されたことに始まりますが、完成まで5年もかかりました。というのも、当初の建設予定費用の1万円は、全額寄付でまかなうことになり、当時の佐々木基町長が自ら募金に奔走していたのですが、第一次世界大戦の影響による物価高騰で、予算が再三増額となったためです。最終的には4万4千円もの費用がかかってしまいました。

それほどまでにして町が建設に尽力した理由とは、いったいなんなのでしょう。そのことを開館式における町長の演説から探ってみましょう。まず当時の渋谷町においては「住民各自が隣保相扶け共同相扶クルト云フ情誼ガ乏シ」く、したがって、その改善が「本町治ノ急務」といいます。そのための方法の一つとして「住

公的ニ、或ハ私的ニ屢々(しばしば)会合接触ヲ重ネテ、互ニ意志ノ疎通ヲ計リ交際ノ親密ヲ期」するのが最も適切であるということです。こうした当時の渋谷町の状況は、明治22年(1889)まで複数の行政区域があったことによる対立、そして急激な発展による新旧住民の間の軋轢などが背景にあったようです。

多くの町民に利用されてきた公会堂ですが、昭和7年の渋谷区の成立後、公会堂自体は移転し、従来の建物は税務署、渋谷区立商業学校などとして使用されました。そして15年には、渋谷区武道館として生まれ変わりました。しかしその後、すぐに太平洋戦争が始まり、20年5月25日の夜、住民に親しまれたこの建物は空襲により焼失してしまいました。

なお、建物の前にある道路は「公会堂通り」と呼ばれ、また昭和3年の渋谷町の字名改正時に、公会堂のある地域は、建物にちなみ、「衆楽(町)」と名づけられました。しかし、その町名や通りの名称も失われた今日、かつての姿をしのばせるものは、ほとんど残っていません。



昭和7年ごろの渋谷町公会堂

## 木内昇が描く60年代の渋谷

昭和42年(1967)東京都で生まれた木内昇(きうち のぼり)氏は、小学校4年生の時に放映された大河ドラマ「黄金の日」(原作・城山三郎)をきっかけとして、中学・高校と司馬遼太郎作品を始めとする歴史小説、ひいては様々な文学作品を読むようになりました。高校時代には雑誌を作りたいという思いから、将来の夢を編集者に据え、大学で心理学を学ぶ傍ら、夢野久作・織田作之助・岡本綺堂などの作品を乱読しています。

大学卒業後は出版社に就職し、雑誌の編集を担当する一方で自ら取材も行い、記事を書くという経験を積みます。平成9年(1997)に退社・独立し、音楽雑誌「Spotting」を立ち上げました。その後、新選組に関する京都ガイドブックを出版する企画が持ち上がった際に、木内氏がサイドストーリーとして執筆した物語が、平成16年に『新選組 幕末の青嵐』として上梓され、小説家としてデビューします。

翌年『地虫鳴く—新選組裏表録』を出版したのち、幕末の江戸から昭和の東京を舞台とした短編集『茗荷谷の猫』で、平成21年に第2回早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞を受賞しました。続いて平成23年に『漂砂のうたう』で第144回直木賞を受賞しましたが、木内氏本人はその際「作品ではなく人となり」ばかり取り上げられることが嫌だったそうです。また平成26年『櫛挽道守』で第9回中央公論文芸賞、第27回柴田錬三郎賞、第8回親鸞賞を受賞していま

す。

木内氏は編集者時代、自身の嗜好に合わない雑誌でも「いいところをどうやって見つけていくかという能力のほうに、自分の糧になると思っていた」と語っています。物事に対する評価を他者任せにせず、長所を見出す努力を怠らないという、作家の姿勢は作品にも表れていると考えられます。

『茗荷谷の猫』には短編「スペインタイルの家」が収録されています。第一回東京オリンピックを目前に控えた昭和60年代の渋谷を舞台に、「広い木製デッキと外国製のタイルをあしらった玄関」を備えた、とある家に惹かれる若い電気工・尾道俊男の日常と心の機微が描かれた作品です。本作には俊男と妻・祐子が住む「渋谷金王町のアパート」や通勤路の「さくら横丁の細道」、休日に夫婦が散歩する「鳩森八幡の富士塚」など、渋谷の風景が随所に確認できます。スペインタイルの家はいったいどこに建っていたのでしょうか。

2020年には夏季オリンピックが、56年ぶりに東京で開催されます。この間に渋谷の街がどのように変わってきたのか、地図を片手に歩いてみるのも一興かもしれません。

『茗荷谷の猫』 平凡社  
平成20年(2008)



## 収蔵資料紹介

### 山正廣講祭事具

(富士講祭事具)



注・写真には木花咲耶姫（中央）と花器（右）の影を入れています。

江戸時代、富士山を神として信仰する「富士講」と呼ばれるグループが「江戸八百八講」と言われる程多く作られました。現在の渋谷区恵比寿周辺でも、山正廣講というグループが盛んに活動していました。今回ご紹介する資料は、そのグループが祭事に使用した道具です。このグループについては、平成二十一年に当館で調査が行われるまでほとんどわかっていませんでした。しかし、調査の結果、講の指導者であった「浅井先達」の遺族が見つかり、同家所蔵の写真や関係資料を当館にご寄贈頂きました。今回の資料は、その中の祭事具です。これは毎月行われる「月拝み」という行事の際に使用されました。

「拝み簞笥」と呼ばれる高さ四十センチ程の小型の簞笥を置き、祭壇を作ります。そして、中央には富士山の祭神である「木花咲耶姫」の木像が置かれます。しかし、その像は太平洋戦争で焼け、現存しません。祭壇の蜀台には蝋燭を立てて火を灯し、御神酒徳利にはお酒を入れ、講の印が形取られた蓋を閉めます。一番外側に置かれた花器（一つ欠）には榊が入られ、床に置かれたお焚き上火鉢に線香を山型に並べ火をつけ、祭事が行われました。祭事は線香の白い煙が立ち込める中で「お伝え」というお経のようなものが唱えられ、一時間ほど続けられたといえます。現在は富士講の多くが活動を終え、こうした資料は僅かしか残っていません。特にこれと同じ仕様の道具は他に見つかっておらず、貴重な資料です。

#### 【今後の展示予定】

◆企画展「道具のかたち—区内出土資料からみた道具のいろいろ—」

平成30年1月30日（火）～3月25日（日）

◆企画展「第18回渋谷現代短歌優秀作品展」

平成30年4月1日（日）～4月8日（日）

◆企画展「渋谷のむかし写真展シリーズ24」

平成30年4月14日（土）～6月10日（日）

#### 白根記念

#### 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 11:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※1日以内は10名以上の団体料金

※60歳以上の方、障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.37

平成30年3月1日発行